

## 400年を経て今なお残る『岡崎二十七曲り』を見直す

OAC(岡崎アーカイブセンター)  
木村剛也



皆さん、おはようございます。帽子を脱ぐとこのように、私は髪の毛が少なくなっちゃってしかも五分刈りにしています。五分刈りにした理由は、今年の夏 籠田公園夏祭りに“足湯もどき”を画策して参加した日があまりに暑かったので、翌日から五分刈りにしたのです。とってもスッキリした気持ちで、風呂上りでも寝起きでも髪をどうこうするなんて考える必要はありません。本日はカメラのフラッシュでハレーションを起こして写りが悪くなるとかとも思いますので、帽子を被ったままで話をさせていただきます。

【註；以降は、話しの内容に沿うような箇所に 章や項を文中に挿入しました。

また 代表的な映像のみを本文に挿入してまとめましたのでご了承ください。

なお 掲載できなかった映像に興味がお有りの方はOACまでご連絡ください】

### はじめに

さて岡崎二十七曲りとは約400年も前からあった東海道ですが、これについて岡崎アーカイブセンター（以降 OACと記します）で検討してみました。OACとは、岡崎の町並みを現物では保存は出来ないが、デジタル映像でならパソコンの中に多くの映像を集められ、それらを有効に利用できると思った活動をしています。少ない仲間が趣味でやっているようなもので、これからも多くの方からお知恵を拝借しながら活動してまいりたいと思っています。現在私はOACの他に、りぶらサポータークラブやNPO法人岡崎都心再生協議会にも所属してまちおこし活動をしています。本日は、ここで報告させて頂くことにより、皆さんのお知恵をお借りし易くなると考えて臨んでいます。

資料としてお配りしましたパワーポイントの数は、岡崎二十七曲りにあやかって27画面としました。報告の内容は観光歴史資産の再考察として岡崎城に今も建っている“公園の碑”や旧東海道岡崎宿場町の“岡崎二十七曲り”、また宿場町の西側終点となる“矢作橋”に関して、OACで集積した映像を基にして考えていきます。

なお過日の岡崎学特別講座での備前屋 中野様や、岡崎市の堀江学芸員のお二人が話された内容と重複する映像などもありますのでご承知おきください。

### 1) OAC活動のご紹介

まず自身の紹介をします。私には子どもが3人います。転勤族でしたので金沢、東京、札幌と転居したあとの昭和38年に岡崎に舞い戻りました。昭和19年に両町で生まれましたので昨年で50年 半世紀ものあいだ岡崎に住んでいたことになります。転勤先で岡崎市を紹介する時は、お城があるとか家康公生誕の地だとか言っても、本人があまり郷土のことを知っていなかったため、岡崎市の本当の素晴らしさを伝えられなかったのです。岡崎に戻ってから康生周辺が急速に閑散とし寂しくなっていくのを垣間みて、ふるさと岡崎に先人が残した歴史などの伝承についての今後を危惧しました。



そこで岡崎城の壮大さを知ることのできるグッズとして左の城郭絵図と現代の地図を重ねて見られる「アナログ城下町」という仕掛けをりぶらサポータークラブのプロジェクトで作りました。A4クリアファイルに絵図を印刷し、その中に現代地図を挿入して今と昔を重ねて見られるものです。1年前にこの会場の北側で延長約30メートルもの大規模な二段石垣が発掘されました。平成19年11月4日中日

新聞朝刊で報道された石垣ですね。この石垣に続く西側をもっと調べようということで城北公園で発掘調査をされました。この位置では二段石垣が続いていなかったようで、遺構などは見つからなかったと聞いています。

また岡崎市図書館交流プラザりぶら建設現場では、地下の遺構が見つかったのかは知りませんが、石垣などの遺構は康生の地下で100年以上も前から眠っているのです。

私はこのような岡崎に、歴史を感じながら市民が市内を散策できるような発想があったらな～と常々思っています。イベントに加えて観光施設としての箱物だけじゃなく、市民が康生を散策したくなるような仕掛けを作って欲しいと考えています。例えば康生の街角の小さな空き地に“足ツボ遊具”などができたらいいな～と思うのです。

## 2) 収集した映像の紹介

映像(1)は岡崎城惣構の籠田惣門を南東側から観たものです。絵図の右方向になる伝馬通りから二つの角を曲って来た人達が、田中堀に架かった橋を渡って籠田総門をくぐっている様子が描かれています。右側から左に門をくぐってすぐに右折し、さらに左に曲がりすぐ右折して戦災で消失した籠田通りを北上していきます。今の籠田公園を突き抜けて連尺方面へと続く岡崎宿場町の二十七曲りと呼ばれた旧東海道を描いています。

冒頭で“足湯もどき”の話をしました。サンホテル前に小さな石像があって、これが桶にお湯を入れた現代の足湯に見えたので“足湯もどき”と命名したのです。

その後も触れた“足ツボ遊具”ですが、岡崎市にはげんき館の建物横の歩道部に小規模ですがこれがあります。写真(2)は安城市で見つけた足ツボ遊具で「健康物語」という名前の遊具です。街の中にこういった小さな癒しの遊具があると、冬の寒い時にも足で踏むと温かく健康になれる...こんな遊具も籠田公園にあればいいな～と。

2年間ほど前からアーカイブスを目的として岡崎の町並みが写った映像を探してきました。写真(3)が良く目に触れる宿場町の風情がまだ残っている籠田から欠町方面に続く伝馬通りです。籠田通りは無くなっちゃいました。

明治の中頃にはJR岡崎駅近くを鉄の塊の汽車が、凄いスピードですっ飛んでいるのを見て、大人も子供も大喜びしている絵(4)がこれです。確かに舟や馬車などしかない時代に、メカの塊である汽車が煙を吐いて走っていたのですから...。これは東岡崎駅前の乗合バスの写真(5)です。名鉄バスの前身の愛知電気鉄道のバスです。左上に乗車券も写っていて、バス路線も今ほど多くはありません。写真(6)はご記憶の方も居られると思いますが木炭バスです。後部の窯に薪を入れて熱すると生ガスが発生し、それ

を屋根に渡したパイプで前方に送ってエンジンの燃料に代用しました。馬力が小さかったので、私の記憶ですが、西浦行き木炭バスは深溝の坂の手前で「大人は降りて下さい。子供さんは乗っていていいですよ」と。それで大人は降りてぞろぞろバスについて坂の頂上へ、そこでまた乗ってきたのです。車掌と運転手の二人で運行していた時代のことです。写真(7)は東岡崎駅で、二階建ての新駅舎ができる前の懐かしい木造駅舎です。私の幼い頃にみた駅舎前の未舗装のバス停やこの木造駅舎が鮮明に浮かんできます。

次は、岡崎工業高校と倉田産業の跡地に最近できたウイングタウンとの間に、長池の周りを走った岡崎競馬場の映像(8)です。この岡崎競馬場は、後からできた中京競馬場に統合されたので10年ほど営業しただけです。友人から聞いた話ですが、スタンドを蒲郡競艇に寄付し移築されたので岡崎にも競艇開催権があるのだそうです。また、この付近にあった東楽園では写真(9)の様に市民がボートで遊んでいます。今でもここには温泉施設がありますが、池ではボートに乗れません。岡崎には貸ボートで遊べる場所が無くなってしまいました。私の幼少の頃は菅生川でもボートに乗れました。今はボートに乗ろうとしたら、豊田市の鞍ヶ池まで行かないと乗れません。

写真(10)は岡崎市内電車が終点の大樹寺駅へ向かっている雄姿で、その先の郊外電車に乗り換えれば上挙母まで行けたのです。こういう昔の写真は「岡崎の今昔写真集」などのタイトルで市販されています。平成元年に出版された写真集なら、昭和末期の写真が今と紹介されているのです。現在は平成20年ですからこの平成元年発行の本における今とは、今と昔の間なので「ちゅうむかし」と言うのでしょうか…？

現在のまちなみ映像を将来は活用するとの目的を持って、組織的に残していくことが重要であることに気づきました。この頃から友達の筒井 弘さんから昔の写真集を拝借し始めて今でもそれらを大切に保管しています。そんなこんなで、アーカイブスという映像を保存して活用していく発想が生まれてきたのです。

### 3) 岡崎城内だった映像の紹介

右の写真に写っているのは、手前が大林寺郭堀の水面、奥の建物が連尺小学校です。今はこの堀が埋立られて図書館交流プラザ“りぶら”が建っています。昔の写真を探していた時、偶然この写真を友達の柴田良隆さん宅のタンスの紙箱の中から見つけました。当時の絵はがきの中に混ざっていた写真で、大林寺郭堀の水面が貯木場として利用されています。



矢作川上流から丸太を筏師が操って流れ下り、菅生川と伊賀川を經由してこの池に丸太が溜め置かれていたのです。丸太を上へ引き上げている人達も写っています。引き上げたところの町名が材木町なのです。ただし、材木町の町名の云われはこれではなく、1590年以降に岡崎城主となった田中吉正が、この地にあった天神山を削って平地にし、山に生えていた木を材木に加工して町屋造りに使ったところから呼ばれたのだそうです。りぶらの下に眠っている大林寺郭堀の北には連尺小学校があって、次いで岡崎郵便局やプール・スケートリンク場となり、それを取り壊した後に三河小町が建ったりしてきたわけです。

このような町の遷り変わりをアーカイブスし、岡崎の町並みをデジタル映像に変換し

て保存し、実物ではありませんが映像によるまちなみを保存活用することは大切です。皆様やその知人、近所のお宅などのタンスの中にも岡崎の昔が写っているお宝写真がありましたら、是非それをアーカイブスさせて頂きたいものと思いますので、よろしく！

最終的にはこれらの映像をOACや個人の所有物とするのではなく、内田ジャズコレクションのように行政主導でストックしてもらい、活用していくべきとも思っています。まずはりぶらの施設を活用するのが最適と考えますが、如何ででしょうか？さらにアーカイブスできた映像を整理する際に検索用タグをつけていけば、図書館やむかし館において、例えば「康生の和田屋などの写った様子を見たい」と思ったらサッと瞬時にレファレンスできるようなシステムが導入できたら？...夢ですかネ...？

現行システムでは二段石垣の写真を見たいと思ったら、発掘調査書などを探してから目的の写真を報告書の中から見つけるわけですがけれども、写真1枚がダイレクトに検索でき、それをすぐに活用できるシステムを構築する夢なのですが...

#### 4) 個人からアーカイブスできた映像の紹介

ここからは友達などの個人が所有していた映像をお見せします。

明治21年に出版された三州商工便覧の銅版画で描かれた、岡崎の病院・本屋・薬屋・



酒屋・石屋・料亭などの外観と人力車や街の様子が繊細に描かれたもの(11)です。

次に国土地理院ではなく、大日本帝国陸軍測地部が近代測量技術を駆使して明治23年測量の地図が左のものです。甲山に一等三角点の表示が見えます。当時の伊賀川の流れは、伊賀八幡宮付近から現在の広幡小学校を横切って早川まで西に流れ、愛知環状鉄道北岡崎駅の南で早川に近づい

てからほぼ直角に南に曲って、菅生川まで流れる流路となってます。この伊賀川は、明治末期から大正にかけて洪水防止を目的として流路が変更され、伊賀八幡宮あたりから南に流れる柿田川に沿って岡崎城惣構の田中堀に至るルートに川が付替えられたのです。岡崎二十七曲りの街道もこの工事で付替えられています。

写真(12)の下にも記されていますが、伊賀川改修工事が無事完成した時に発行された記念絵八ガキで、流れを替える工事中の写真をアーカイブスしました。この時代はダンプカーなどの重機はないので、大量の土砂は全てレール上を移動するトロックで運ば

れました。この写真上部には伊賀八幡宮の森が写っており、そこから手前に流れるように堤防が築かれつつあります。写真の左右は低い土地ですが、そこにダムのような堤防が造られて伊賀川の流れを導いたわけです。そうすることにより右側堤防の外側は、浄水場の台地から水がきて常に湿気っていたのです。が、文明が発達してポンプ室なんかできると、普通の雨ですと十分排水され人が住めるようになったのです。そこに今年の8月末集中豪雨で大量の水が流下し、この辺で非常に悲しいことが起きてしまいました。

さて写真(13)は岡崎～多治見を結んだ日本で最初の省営バスです。岡崎駅行とありますが、東京の鉄道博物館に保存されている展示されているバスです。

まる庄呉服店の加藤様が保存されておられる絵ハガキからは、岡崎城が再建される前の岡崎公園での伊賀川の様子(14)です。桜の季節で多くの市民が楽しそうにボート遊びをしています。前述しましたがこういうボート遊びが岡崎ではできないというのは、孫にボートに乗りたいとねだられても、鞍ヶ池まで行かなくちゃいけないというも寂しいものがあります。この岡崎には是非復活して欲しいと心底から願っています。

岡崎城が再建される前の天守台の石垣(15)が写っています。その東側は松林ですが、現在は龍城神社が建っています。昭和の初めの岡崎公園の本丸辺りがこんな様子だったことを映像で今に伝えられる貴重な絵はがきコレクションでした。

次の写真(16)は岡崎コミュニティの友達からの写真です。幼い子どもを抱いているお母さんの背後に、今の三河武士の館のある付近にあった大きな鳥籠が写っています。ミニ動物園の猿山があったり、能楽堂が建っているところには鹿もいました。伊賀川畔には遊園地もあったけれども、遊園地は南公園に、動物園は東公園に移されました。

写真(17)は今の康生コメダコーヒー店の建つ前の岡崎東宝です。そして国道一号沿いにあった映画館は岡崎劇場(18)ですね。この映画館の跡地は駐車場になっています。

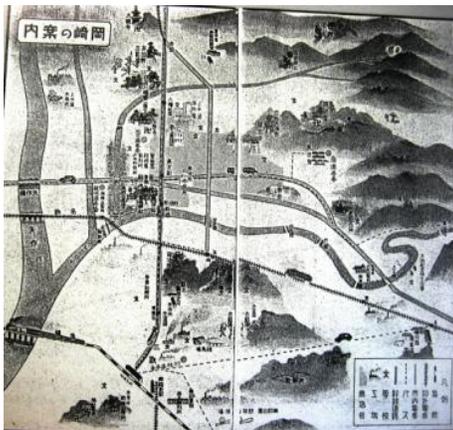
スケッチ画(19)は板屋にあったダンスホールです。この建物も今は無くなっちゃって、取り壊されるのを惜しむ新聞記事をかなり前に見た記憶があります。

写真(20)は昭和40年頃の家康行列です。ここは康生ではなく右側に名鉄電車ガードがある交差点で、市電通りを殿橋の方向に曲がって行く行列の姿です。写真奥が名鉄東岡崎駅で、交差点奥の左手にエコー百貨店という5階建て百貨店が写っています。現在の和証券です。その屋上に小さな観覧車が写っています。同様の観覧車が名古屋三越の屋上に現在もあります。最近そこを訪ねて写真(21)を撮ってきました。3年ほど前に付近に大きな観覧車ができたので、百貨店屋上の上ものは営業を止めてますが綺麗に整備保存されて展示されていました。馬車鉄道を始め省営バスなど、岡崎は新しいものを他の地域に先んじて素早く導入していたんだなあ～という思いがします。

##### 5) 花火大会ポスターのアーカイブス

アーカイブスする映像の形態は、写真や絵はがきの他にもパンフレット、ポスター、絵図、紙芝居、それから航空写真や地図類その他もろもろのアナログ映像の形態があります。これらをデジタル映像に変換して保存し、それを活用していきたいということなのです。例えば写真でなくても花火大会のポスター(22)などもアーカイブス対象です。今年で第60回目となる岡崎観光花火大会の全ポスター60枚をずらっ～と並べて見てみたいものです。今から60年も前の昭和22年の第1回岡崎観光花火大会から現在までの全ポスターを一括アーカイブスしたいものですが、成就できていません。

全て見たいと思って探したところ、何と右のような昭和6年大花火のチラシを見つけました。この時は川面に浮かぶ鉾船が3艘も描かれています。チラシに書いてある文字やその内容に興味を湧いたのでここで翻訳してみました。昭和6年7月19日とあります。今の常用漢字以外の画数が多い漢字とカタカナ混じりの文面です。電車の運行に関しての名古屋行きや豊橋行きの「ゆき」の二文字だけが何故かひらがなで書かれています。大会開催日の電車・バスの運行は翌日午前1時まで絶え間なく運行すると記されています。私は思うのですが、現在の花火大会は9時頃に終わって10時半頃になったらもうあの辺はほとんどの人が引けて静かになります。当時は真夜中を過ぎた午前1時ころまで賑わっていたことが想像されます。チラシには青バスと記されており、このバスは今のJRバスだそうです。そのバスが殿橋、東遊郭間を翌日深夜1時まで走っていた。そういう意味でも当時の岡崎大花火っていう催しは、全市民の想いが集積した賑やかで凄い催しだったのだらうな～…。電気がやっと供給され始めた時代で、今より辺りは相当に暗く、川面には菅生神社氏子町内それぞれが競って鉾船を出したと言われます。6艘もの鉾船が菅生川に浮かび、暗い闇を貫く花火大会の賑わいは今のそれを上回る感動と市民がこの大花火に注いだ壮烈な想いがチラシから読み取れました。



門立とか今はない駅名もチラシに書かれています。昭和の初めの地図(23)において大樹寺から北に延びている鉄道が左右に分岐した右が門立で今の細川団地辺り、左は拳母方面です。この様に大樹寺からの上拳母・門立間行き2両編成電車は、分岐駅から門立と拳母行きに別れたのでしょうか。岡崎駅や西尾線という鉄道の記載もあります。

門立とか今はない駅名もチラシに書かれています。昭和の初めの地図(23)において大樹寺から北に延びている鉄道が左右に分岐した右が門立で今の細川団地辺り、左は拳母方面です。この様に大樹寺からの上拳母・門立間行き2両編成電車は、分岐駅から門立と拳母行きに別れたのでしょうか。岡崎駅や西尾線という鉄道の記載もあります。

左上の地図は昭和の初めの岡崎市観光案内図です。岡崎駅から美合、東岡崎、幸田方面の三路線のバスがあり、東岡崎からは康生から右に曲って東遊郭に曲がる路線と額田の檜山方面に行く二路線のみです。東遊郭はここにありま。これらのバス路線から考えてみると、当時は郊外電車と市内電車やバス、バスも先ほどの乗合バス、それから東海道線からの汽車など公共交通機関のみが主体だったことも読み取れます。またこの岡崎観光案内図から、当時額田は岡崎の仲間だったことが分かります。

## 6) 岡崎公園内の隠れた歴史観光遺産

ここからは岡崎公園で光の当たっていない歴史遺産を紹介するために現在の映像をお見せしたいと思います。明治6年に太政官布告の公園法という法律が定められました。それと同時期に岡崎城一帯は公園になったわけです。当時の公園は愛知県下にはこし

かなかったのです。おおよそのその「公園」という発想が当時の日本にはまだ無かったのです。個人や大名の庭園ではなく庶民が憩う場所、すなわち公園が生まれ始めて直ぐ岡崎にできたのです。その遠望写真が右のもので、背面には明治12年建立と刻印されています。公園配置図(23)を見て頂きますと、その証となる『公園碑』は東を向いた徳川家康公銅像の背後に建っています。公園配置図はパンフレット類ではなく、岡崎城の公園を大規模に整備する許可を得るために県に出した市の図面



です。公園が整備された後は、県内名所アンケートで第1位になりました。ちなみに岩津天満宮は第9位となり、県内観光ベスト10に岡崎から2か所も選ばれたのでした。

公園配置図の左上にある建物は岡崎町立図書館(24)で、その東には市民病院の前身であった愛知支病院(25)という病院名も記されています。この病院に通った経験者の手記を配付してありますのでご覧になってください。当時はビデオなどのビジュアルな動画記録手段が無かったので、手記という形で連尺から矢作まで歩いた時の街の様子、矢作川・矢作橋の様子などがかなり詳しく著わされています。この手記に記されている建物や風景を、あたかもビデオを見ているように写真で順次見ていくことができれば、当時にタイムスリップしたような感覚を味わいながら、昔の岡崎の街を散策したような気持ちになれるのではないかと思います。

岡崎城郭絵図(26)の上部に最後の城主である本多氏が書き添えた漢字カタカナ混じりの書があります。読みにくいのですけれども翻訳してみました。『岡崎城はずっと戦塵に委せず、長い期間繁栄してきた。明治になって城は岡崎県庁庁舎に、すぐ額田県庁舎にもなった。それが名古屋県と合併して愛知県になり、県庁舎の役目を終え壊されるので、庭園跡は公園となし、余は隠居する』と記されています。

こういった史実を伝える公園碑のことが、観光案内書などのどこにも書かれていないということに対し、もっと史実を掘り下げてPRした方が岡崎市民や観光客のためにも良いのにな～と思います。だから、岡崎市民にとって大切な岡崎公園の中に「公園」という2文字しか彫られていない、公園碑という遺跡の存在を後世に伝えてほしいものです。先にも言いましたが碑の裏を覗くと明治12年10月建立と記されています。岡崎公園の今の案内図(27)の中でもこの公園の碑のことは一切触れられていません。是非こういう歴史的な遺跡を大事に扱っていくべきだな～とつくづく思います。

### 岡崎二十七曲りを見直す

それでは岡崎のむかしの町並みや歴史的遺跡の話が長くなっちゃいましたが、本論の岡崎二十七曲りの話題に入っていきたいと思います。二十七曲りを歩いた方も多くおられると思いますし、最近で岡崎市でも二十七曲りを見直し、案内標識などを整備していく機運が見られます。げんき館の整備の一環ではないかと思われませんが、二十七曲りの起点にモニュメント(28)が新設され、角柱の上に金のワラジを載せた案内標識(29)などが建ち始めています。これは市役所内のワーキンググループで議論した成果だそうです。ここに持参した二十七曲りガイドマップも市で作られた第二版で、初版はかなりおかしなところを曲がっているので、修正して印刷し直されたものです。

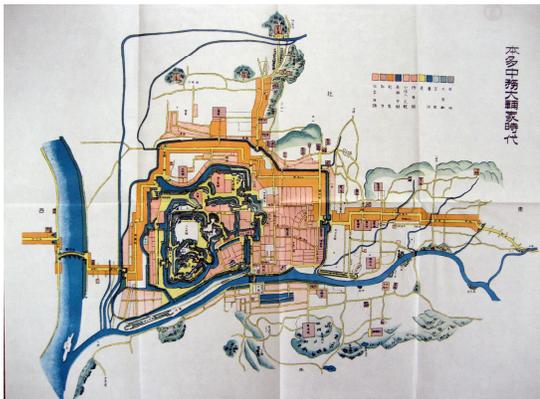
## 1) 江戸時代絵図からの考察

二十七曲りについて映像で見ていきましょう。まずルートはどうなっているのだろうかということで、ルート案内の一つですが右写真のように岡崎公園大手門の前に大きな黒い御影石に彫ったものが2枚並べて表示されています。左の石盤案内図(30)は惣構とか田中堀って言われる外堀に囲まれた岡崎城内ルートを詳細に示しています。右側のもの(31)はげんき館から市内を抜けて矢作川に至る全ルートが案内されています。この左右に描かれたルートを週刊誌の間違い探しではないのですけれども、詳細に比較してみますと、4カ所でルートや曲り位置が異なっています。案内図の基にした図面の作者が違ったから仕方ないとは思いません。こういった観光客が目にする案内図はしっかりとしたルートで在るべきと考えて、OACで見直すことにいたしました。



まずOACが集積した二十七曲りの描かれてた絵図や地図などを見ていきましょう。これはかなり古い絵図(32)で、矢作橋が架かっていますから田中吉政が城主だった時代1600年頃のものでしょう。二十七曲りに執着した絵ではなく、岡崎城の周りにどういった集落などが存在しているかを概念的に描いた絵図です。

次は、二十七曲りを市民に紹介する絵図展示イベントがこの会場前のロビーでほんの少し前にありました。畳2畳ほどもある大きな明治13年の地籍調査図(33)も展示され、明治時代の岡崎二十七曲りの曲がりの角にはピンの旗が建てられ、げんき館南東角から籠田総門で城内に入り松葉総門から抜けて矢作橋に至るまで表示されていました。



左の絵図は1700年頃の本多家時代のもので、この川が伊賀川です。その東側を流れ下っているのが柿田川です。惣構である田中堀が岡崎城の周囲をこういうふうに取り囲んでいたわけで、外堀の役目を果たしていました。岡崎二十七曲りの全ルートが最初に絵図として描かれたものだったのでここで紹介させて頂きました。

こういった方法で二十七曲りを時代毎に描かれた絵図を重ねて対比していけば、おのずと正確なルートが表せられるんじゃないかと思ったわけです。この絵図の描かれているのは前本多家時代のルートです。この後の時代の絵図としては2ページに掲載している水野家時代のもので、この絵図は比較的精度が高く描かれており、近代測量により作られた地図とを重ねて見てもほぼ耐えられる絵図です。

舟便は伊賀川から田中堀経由で信濃門まで来て、そこで荷物を積み替えてさらに田中堀をさか上って八幡町の辺りまで来ていたよ～って千賀酒屋のお爺ちゃんが言っていました。この辺の千賀酒屋まで重い酒樽を舟で運ぶことができたのだそうです。今だっ

たらトラックがありますが、明治初期までは重いものを遠方まで運ぶ手段は水運に頼るのが常だったそうで、岡崎城を取り巻く田中堀は水運にも寄与していたのでしょう。

## 2) 明治以降のルートを検証

右の図は愛知県地理誌のもので、二十七曲りは忘れ去られて旧東海道は康生経由で公園を抜ける短いルートに変わっていったことが記述されています。これがこの頃の国道1号のルートで、二十七曲りの旧東海道の道筋だったのです。あまりにも屈折が多かったため馬車や人力車が走りにくくて、康生通りに移っていきました。ここが康生の交差点になります。旧東海道だった岡崎二十七曲りの道もショートカットしたこれらの道も、直線で市内を貫く国道1号が伸びてきた大正時代になると、東西交通の役目を終えて忘れ去られていったのです。



もう一度45ページの明治23年の近代測量地図を見てください。街中を東西に抜ける曲りの多い幹線の道路が旧東海道 岡崎二十七曲りで、国道1号は影も形もありません。

次の地図はまだ電車が殿橋までしか開通してない大正10年の地図(34)です。これを見て頂くと判りますが、二十七曲りの道がまだはっきり残っています。戦災で焼失してしまうまで残っていたのです。明治23年と大正10年の地図を比較すると、双方で大きく変わっているのが伊賀川の流路です。46ページでも述べましたが、伊賀川は大正10年には東側の台地に沿って流れ下る柿田川と並行するルートに変わっています。

これにより伊賀川と大林寺郭掘りの水面がつながったので、44ページに挿入した写真のように貯木場に利用できたわけです。伊賀川流路の変更工事は、田畑だった西側の低い土地に土を高く盛り上げて堤防にする工事でした。りぶらの西にある伊賀川対岸の堤防だけに、斜めに下る斜路が10本以上あります。これは工事の際に土砂を運搬するトロッコ用のレールが敷いてあった遺跡です。明治末期の工事で使われた斜路が現在もそのまま残っているということは、これらの斜路も歴史遺産と言え遺産なのです。殿橋と明代橋の下流側に今も残る3本の斜路が45ページの地図から読取ることができます。

岡崎二十七曲りだったルートを明治大正の二つの時代の地図でもう1度重ねて見ると、このように二十七曲りルートが変わらずにはっきり残っているのが判ります。

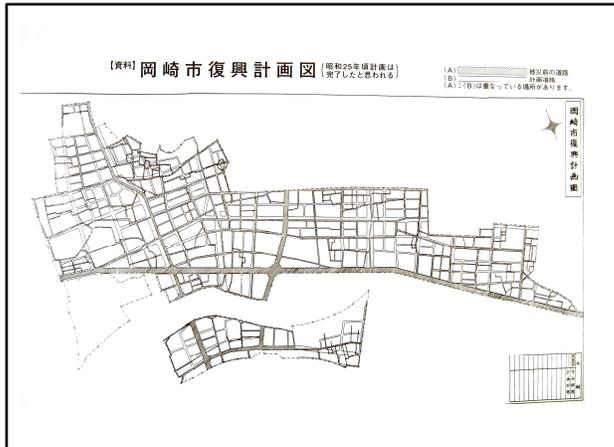
## 3) 岡崎空襲で被災した以降のルートを検証

第二次世界大戦で岡崎市は空襲によって中心市街地のほとんどが灰燼に帰しました。貴重な歴史資料の宝庫だった図書館も宿場町風情が残った街もその全てが消失したのです。岡崎空襲によって二十七曲りの街並み全てが焦土と化したのです。OACではその空襲2年後の昭和22年の岡崎市を撮影した航空写真を連尺小学校でアーカイブできました。それが右の写真です。



矢作川と橋、岡崎公園とグラウンド、連尺小学校や師範学校、伊賀川、電車通り、モダン通り、伝馬通り、国道1号、名鉄電車の軌道などはすぐに判ります。

写真中央上部に瓦屋根が残っている街並みは、消失を免れた能見町や福寿町と判別できます。電車通りより太く南北に延びる道がモダン通りですから、伝馬通りと交差するここに永田屋精肉店が燃えずに残っていますね。この航空写真から消失したか残ったかを判読でき、戦前の地図も参考に岡崎二十七曲りのルートを見ていきました。



宿場町だった岡崎の街並みのほとんどが燃えちゃった後、岡崎市戦災復興計画事業が開始され、左図のように街路は拡幅され、新たに公園などが配置されました。中央の左右に延びる太い直線は国道1号でその南側に連続する空白部は乙川です。康生交差点から東に行く道が僅かに右に曲がる付近と、菅生川から北に延びる中央緑道と交差する部分に台形に見える箇所、これが籠田

公園の周辺道路ですね。道路の幅員が狭かったのであたかも黒く塗りつぶされている様に見える線が消失前の道です。薄く白っぽく見える線が拡幅された新しい道で現在のものです。籠田公園の出現で籠田通りが無くなったのが良く判ります。電車通りを見ますと3倍くらいに、康生通りや伝馬通りは2倍半くらいに道幅が広くなりました。二十七曲りだった伝馬通りも拡幅されたので、今の道の南側歩道部をルートが通っていたということまでもこの計画図から読み取れます。

#### 4) 岡崎二十七曲りルートの全貌確認

まずこの計画図で二十七曲りルートの始点から伊賀川に架かる柿田橋までを見ていきます。ここがげんき館ですね。ここからず～っと西側に行きここで曲がり両町の公民館に出ます。さらに右に曲がってガソリンスタンドに突き当り、そこを左に曲がってず～っと西に行きます。モダン通りを過ぎて最初の角を左折しすぐ右折すると、岡崎信用金庫資料館の前を通ります。その西の籠田郵便局付近から籠田公園の方向に曲って北進します。台形に見える部分が籠田公園ですね。籠田公園の中をず～っと北に通って、公園北西の角を左折して連尺通りを行くと、シビコ北側の自転車置き場付近に出ます。ここを右折して、こう行って、こう行って、こう行ってと、伊賀川で交差する部分までが手に取るように判ります。しかも拡幅された道路の何処を二十七曲りルートが通って



いたかという細部まで判ります。先に確認したように伝馬通りは南側歩道部を、材木通りは北側歩道部を通っていました。この様に今の道路のどの個所を通ったのかまで明確に確認できます。

これまでに多くの研究者が二十七曲りルートを提案する案内図を作っています。20年ほど前に発表されたものですが、左の図のように当時の地図に岡崎城の堀や

二十七曲りルートを書き込んでいます。この例のように古くから個人が独自に調べて発表してきているのです。OACの場合はパソコン上で様々な時代毎に変遷した絵図や地図を重ね合わせ、二十七曲りルートを時系列的に追っていく手法により確定していくので、現時点では最も正確なルートと確信しています。なお、岡崎市史近代編2にとじ込んである3色刷りのルート図も、伝馬通りでは南側歩道部を、材木通りは北側歩道部を表示しており、そこまで考えて作図していますが、ルート全体は示されていません。

さて、柿田橋西端付近で伊賀川に沿って国堂1号までの短い区間で4回も曲ります。右の絵図は松葉総門付近です。総門から伊賀川を渡るまでの間に4回も曲がっています。この絵図は43ページの水野家時代の松葉総門部分を拡大したもので、よく見ていただきますと総門前後でぐにゃぐにゃぐにゃぐにゃと曲がっています。松葉総門は、凱旋門みたいに道路を横断して建っていた門ではなくて、道と並行に門が建っているので門をくぐるために右に曲がります。すぐ左に曲って伊賀川を渡り、橋を渡り終わったらすぐに右に曲がってさらに左に曲がると、矢作川方面に向かう街道に出られます。別の時代の複数の絵図でもこの様に4回曲っています。しかし、洪水で矢作橋が何度も何度も流失し架け替えられたように、松葉総門や伊賀川を渡る橋も何度も流失して架け直されたのでしょうか。今の二十七曲りルート案内図では籠田総門で3回曲げたルートで紹介されているのですが、松葉総門では曲りが考慮されていません。推測ですが、総門や橋が度重なる洪水で壊れその建て直しが度重なったので、正確な位置や形状などが一定ではなく、松葉総門における曲りは省略されたのでは...と！



話は飛びますが、総構（田中堀）の石垣が発見された事実が、最近あったのです。二七市通り沿いで火災になったキッチンフタ前の道路を隔てた南側の駐車場新設工事現場から丸石が多数出てきたそうです。が...発注者や工事監督者もあまり気に掛けずにその石垣はすぐに撤去され、残念ながら写真も無いのです。しかしこの現場から少し東側に行った駐車場から個人宅の裏庭が覗くと、その庭の背景に見立てた露出している丸石の石垣が見えます。これが田中堀の存在を示す唯一の史跡と考えられますが、こういうものも放っておくと無くなっちゃうんじゃないかな～、大事にしたいな～って。

##### 5) 矢作橋は岡崎二十七曲りと一対である

堀江学芸員の講演にもありましたけれど、矢作橋も歴史的構造物ですよ。江戸時代から矢作橋に幕府直轄で架けられていた矢作橋は、国内では飛び抜けて長い橋だったわけで、しかも岡崎宿場町の西端部になる訳です。従って、岡崎二十七曲りを活性化するには、この矢作橋の件は切っても切り離せないものと位置付けるべきで、後世に伝えるべきであると考えます。矢作橋をアーカイブスしていくうちに気づいたのですが、岡崎二十七曲りとこの矢作橋をペアと捉えて、岡崎の歴史観光資源となるようにもっと利用する方法などを考えていく必要があると思いついたのです。

##### 6) 岡崎二十七曲りに足りない物は？

さて話を二十七曲りルートに戻します。一般にルートというのはスタートとゴールがあります。山登りとか四国88霊場巡りのように、始まりがあって終わりが判って初め

てチャレンジしたくなるし、興味も湧くというものです。岡崎二十七曲りには始点と終点が決まっています。

またあれだけ曲がっているのでガイドブック無しで巡った場合に、歩いている本人は曲りの位置がルートの中のどの辺りなのか判らなくなってしまう。

そこで、起終点を定めるとともに、曲り角の全てに番号を付ければ、非常に判り易くなることに気づきました。表示方法には道路紙なんていうものもあります。数年前にロンドンで見つけたもので、ダイアナ妃が公園を歩かれたルート上に直径20cmほどの真鍮の道路紙(35)が曲りなどの要所に打っており、ガイドブック無しでも、ダイアナ妃が歩かれたルートを迷わずにたどることができるようになっていました。

また、安城や知立には旧東海道の松並木がある街道ですが、道路の歩道には通学路を示すために歩道部にはグリーンのマーキングしてあるのと同様に、旧東海道では側帯のところに茶色の道路ペイントでピュッと引いた表示(36)があり、これが旧東海道の路だったということを示して案内しているのだそうです。

これまでの話で何度でてきた田中堀っていう水路は、岡崎城を取り巻く外堀ですが、今は全てが埋められて道路や住宅の下に隠れてしまっています。これを地表に炙り出し絵図のように表示できる余地のある部分だけでも良いので、この下には堀があったということが判るような、例えば水色のペイントで地上に表すことができれば、籠田公園の東側には南北に走っていた岡崎城の外堀があったんだなあ～とか、電車通りと材木通りが交わる交差点付近には田中堀や信州に続く塩の道の始点である信濃門があったというようなことが意識せずに判るようになります。観光客や市民が意識せずに判ることが岡崎城の壮大さを知るきっかけになるとと思いますが、如何なものでしょうか？

また、27か所の曲がり角毎に押印するカードや完歩した証明書を発行するなどの企画も考えられ、これらを岡崎都心再生協議会やりぶらサポータークラブなどで何とか実現してみたいな～と思って、関係部局に協力依頼や提言をしていくつもりです。

### 7) 27の曲り角に番号を付ける

ここからは岡崎二十七曲りを活用する一つの提案として、先に触れましたように絵図や地図で判明した岡崎二十七曲りの曲り角に番号を付けてみたいと思います。岡崎げんき館の南南東に冠木門がありますが、一般にはげんき館の駐車場東南角のモニュメントが新設された曲り角を1番としています。その後の曲り角を27番目の曲り角までず～と見ていきます。資料としては末尾にあります5つの絵図や地図を参考にしてください。

1番曲りからまっすぐ西進します。空襲で燃える前の2番曲り角は両町公民館前です。しかし、戦災復興計画で2番曲りの手前で直進できなくなった部分があるので、1番からの道を道なりに西進し右折して両町公民館の前に出ます。伝馬通りのガソリンスタンド前で左折する角が3番、伝馬通りをしばらく西進し“足湯もどき”の発想となった小さな石像が並ぶ歴史プロムナードを抜け、本陣跡地に建っているコンビニエンスストア前を左折する角が4番曲りです。そこを南下してすぐ5番の曲りを右折すると、左手に御馳走屋敷(旧伝馬公設市場跡地)のあった空き地、右手には赤レンガ造りの岡崎信用金庫資料館の横に出ます。この先に籠田総門があって、ここから岡崎城内に入ります。

この付近の様子を描いた映像の一つ目は、籠田総門の東南側から見た総門付近の俯瞰図(37)です。次いで備前屋の中野様の講演時に見せていただいた映像(38)をアーカイ

ブスさせて頂いたものです。この絵図には非常時の武器庫みたいな長屋の右側に岡崎城外堀の田中堀に架かっていた橋が見えますので、総門内側から観た様子です。

このように田中堀を橋で渡ると籠田総門になります。総門をくぐって右に曲るのが6番の曲りで、さらに総門内の7番を左折してすぐ8番で右に曲がって籠田通りに出ます。籠田通りは岡崎空襲で焼失した後、戦災復興で籠田公園が通りだった場所に新設されたのです。この籠田公園を北につかった公園北西の曲りが9番曲りになるわけです。

9番曲りまでのルートや、ここからさらに西進して伊賀川に架かる柿田橋右岸までの曲りの14番に至るまでの二十七曲りルートを、51ページの戦災復興計画図から読み取っていきます。10番曲りはシビコ北側、11番曲りは前川医院前、そこから12番への旧道は復興計画で消滅しています。材木通りに出て左折する曲りが13番、そこから材木通りの北側歩道を西進して14番曲りの柿田橋の右岸に至ります。

この14番曲りから国道1号の南の歩道部にある19番曲りまで15、16、17、18と4回も曲ります。国道1号の南側歩道の19番曲りに行くには、国道1号を横切れないので迂回が必要です。市の案内では国道248号交差点の横断歩道を迂回するルートを推奨していますが、私は伊賀川の交差点を迂回するルートをお勧めします。この迂回ルートからは岡崎城天守閣が近くに望めますし、19番から20番のルートを必ず通過できるからです。19番を国道1号に沿い西進し左折する角が20番曲りとなります。20番曲り角から南進して21番の曲りを右折西進すると国道248号との交差点に出ます。この付近には松葉総門があって岡崎城内から外に出ることになります。松葉総門では田中堀・伊賀川を渡る複雑なルートがあったのですが、明治以降の道路の新設や河川の付替えなどで当時の面影は全く残っていません。ただ松葉総門の曲りを無くして結んだ道路が、直線ではなく少々折れ曲っているのがその名残でしょう。

さて籠田総門の中には短い曲りが3回あったのですから、松葉総門でははどうだったか？ということになります。52ページに挿入した拡大絵図のように22、23、24、25と4回も曲ってから矢作川方面に西進する図になっています。矢作川に突き当たった所で右折する曲り角が26番、矢作橋を渡るために左に曲がる角が27番です。というように、岡崎宿場町を27回も曲っていたとの云われに合致します。

このことについて、市学芸員の堀江様や、新行先生、たまじゅうの加藤様、まる庄呉服店の加藤様などに提案させて頂き、様々なアドバイスも頂いております。

## 8) 岡崎市中心市街地活性化基本計画に一言

中心市街地活性化基本法に基づいた計画として岡崎市でも標記の基本計画が策定されています。そのコンセプトでもある歴史文化の薫るっていう街を生み出すための手段として、OAC活動のような昔の映像を集積して行って、その映像によるまちなみの保存やその活用をしていくっていうのも、一つの大きな方向、手段ではないかと思います。また歴史や文化の保存継承やその活用は行政まかせではなく、住民が守るということも重要です。例えば中心市街地内での工事中に石垣などの遺構と思われるものが出てきたら、それらが先人達が築いた歴史的財産と認知して文化財担当の行政側に知らせると言う意識改革の必要性です。工期は遅れるかもしれませんが、岡崎市民としてこのお城の周りに住んでいる私達にはそういった自覚っていうんですか、郷土愛というものがあれば、先人の築いてきたふるさと岡崎の歴史遺跡をこれからも守れるんだろうと思います。

そういう気持ちや考え方をもっと極めていって、市民の皆さんにも絶滅危惧種でもある古いアナログ映像の発掘保存を目指すOACの活動に対してのご協力をお願いしていきたいと考えています。

中心市街地の活性化では、拠点を整備していく段階から、整備した拠点個々を線で結んでいき、面に拡げていくというステップを踏む考え方です。

さて、講演で配った五つの絵図や地図の全てに岡崎二十七曲りの曲り角の番号を付けたものを末尾にも掲載しました。これらが公式ルートと言うか公認ルートって言うのですか？ 商工会議所、ライオンズクラブ、市役所、私ども一般の研究者が相互が納得して合意した1本のルートに決め、互いに活用していくという大方針が必要ではないかと思えますね。城址公園の整備とか籠田公園の整備、岡崎市図書館交流プラザりぶらです、これらの施設は二十七曲りと密接に関係する場所にあるのですから是非是非そういった岡崎の歴史遺産などを常々念頭に入れて連携できるようにしなければならないと考えます。二十七曲りの道標なども、始点から終点まで全て同じスタイル・考え方で整備し、観光客や市民が迷わず楽しんで歩けるようにしていくべきと考えます。

中心市街地活性化基本計画案のパンフレットの「城址公園の整備」と位置付けた事業の中に、右のスケッチのような隅櫓が出来るんだそうです。よ～く見ると旧グラウンド東の駐車場からバリアフリーを考えたエレベーターに乗って大手門方面に行けるような計画に見えます。



記憶ではこの隅櫓の東側には霊厳な雰囲気漂う素晴らしい石段と石畳があったんですが、今はバリアフリー化と称してコンクリートの平坦な坂になっちゃっています。が..やっぱりこういう石段は元通りに復元して頂き、車

いすの方の駐車場を大手門の東側の大型バス駐スペース1台分に車いすマークを付した専用スペースにして、大手門方面に行ってもらえるようにされるのが良いのではないかと思います。隅櫓にエレベーターを備えれば、多くの観光客が石段を通らずにエレベーターで大手門方面に行っちゃたら、岡崎城の観光には相応しくないと感じます。

さらに国道1号の交番付近からグラウンド東の一般車用駐車場への斜めに降りる道路計画のために、思いっきり大胆に樹木が切られちゃってしまいました。あんなにうっそうとした数百年もの間、歴史を生き抜いてきた樹木を無造作に切れるなんて、本当に残念ですし企画した組織の者を許せません。多くの市民が怒っています。木々が切られちゃってから気付いたのですが、やはり史跡公園の緑の木々は大切にしてくださいと困ります。

次に籠田公園が二十七曲りのほぼ中間にあたりますので、まる庄呉服店の加藤様が提案されておられるように、籠田総門を公園付近に何とか復活して頂きたい。その夢に加えて私は、市民が無料で楽しめる「足湯」や「足ツボ遊具」を作って頂き、まちの駅籠田公園と改名した歩行者のオアシス的な広場にしたいと勝手に願っていますが...

### 矢作橋の映像アーカイブス

先の岡崎学特別講座の講演で堀江学芸員が「矢作橋っていうのは凄い橋なんだ」と言

われ、私も全く同感です。堀江学芸員の講演を聞く前から、矢作橋に関する映像集を既に作っていたので、重複しますが矢作橋について私も止めずに多くの映像お見せいたします。

岡崎を訪れた旅人にとってこの橋は日本一長い橋として大きな感動を与えたことでしょう。その証に日本人も外国人までも矢作橋の件を必ず手記などに書き留めているほど当時としては大きな長い橋だったのです。1位の矢作橋の長さは180間もあり2位の錦帯橋は120間ほど、3位もその程度だったのですから、それはもう飛び抜けて長い橋だったのです。そういう橋でしたので、岡崎に来て矢作橋を渡った人々は、橋の壮大さを様々な手法で描いたりしています。大きな感動を伝えたいとか見せたいという想いで描いたんだな~と思います。これは冬景色の図(38)で堀江氏の講演の中にもありました。それからこういった錦帯橋みたいな橋(39)を描いています。相当に誇張して描いています。当然記念切手(40)にもなったのです。矢作川って結構暴れ川だったので、壊れて渡れなかった期間(41)が全体の1割以上もあったようです。現在国道1号の矢作橋付替え工事が実施されていますが、既に2~3年間も工事を継続しているのを考慮すると、江戸時代での工期はもっと長かったに違いありません。橋が壊れて渡れない期間は船渡りで渡っていた(42)時期がかなりあったんじゃないかと思います。



右の絵は壊れちゃった橋の基礎工事の様子を描いたものです。皆さんが海水浴に行

ったときに、日よけ傘のポールを砂地に差し込む時にぐらぐら揺すりながら差し入れていくのと同じやり方です。丸太の上には重りとなる土嚢を積んでですね、それを左右の綱を大勢が調子を合わせてエイヤ~コラ~ッと揺すりながら、揺すり込み工法って言うんですけれども、大きな丸太を砂地に打ち込んでいったわけです。昭和30年代頃ならくい打ち機でパンパカ打ち込んだりできたけれど、公害問題などに考慮して今では高圧水流アースドリルで穴を穿ちながらスゥ~と杭などを落とし込む工法などで行われるものです。揺すり込みの作業時間はかなり長かったので、大勢の人工達が、どっかで棟梁が歌っていると思うのですが、絵図に記されているような歌を歌いながら揺すって、丸太を矢作川の砂地に突っ込んでいったということです。こういう木杭が刺さって固定された上に橋床が設けられていきました。中央にあった膨らみは橋の上の番屋(43)だったようです。

絵画の下部にシーボルトと記されているのですけれども、オランダから日本に来た時に矢作橋を渡ってその雄大さにびっくりし、模型(44)を造らせたり絵(45)に描いたりしています。また、それに色付けしたもの(46)も見つかったんです。

明治になってからの矢作橋の写真(47)なのですが、ここに明治10年1月と書かれている木の橋で、今の名鉄の電車と国道1号の間にあった木橋です。自動車がないから、大きい車と言っても大八車や自転車なので橋の幅員は狭かったようです。

木造の橋の写真が残っていたので見てきましたが、それより上流に鉄製の橋(48)が

架かって、これが今の国道1号の一代前のものです。今の橋よりもう少し上流側になります。その橋が完成した時の絵はがき(49)です。丸いコンクリートの橋脚で支えています。設計荷重が小さいので、今の基礎と比べると随分細くて貧弱です。

次に産業面から見てみます。岡崎には水の流れを利用したガラ紡と言うものがありました。矢作川に浮べた船の両脇に水車(50)を取りつけ川の流れを利用したり、川の高低差を利用して水車の動力としたのです。水車を利用するとガラガラガラと音がうるさかったのでガラ紡と呼ばれるようになったとか…。矢作川、滝や洞など多くの地域で水力を動力とした機械によって綿製品が作られていました。

右側の写真を見て下さい。左側に一昔前の国道1号の橋(51)が撤去されて基礎のみが残っています。右側の橋は架設されてあまり月日を経っていない今の国道1号で、現在架け替え工事が行なわれています。この写真はまる庄呉服店の加藤様が集めておられた国道1号の絵はがきです。カメラはまだ一家に1台有るか無いかの時代で、私の家にも父が週刊誌のクイズで蛇腹式のカメラを当て、やっと個人で持つようになったんです。今ではデジカメでフィルムと違って方式の様々なカメラが使われるようになり、一人1台以上の時代になっています。



この写真では、向こうが岡崎ですね。写真の左側に一代前の橋の基礎の残骸が写っていますね。夏になるとプールもない時代ですので、ここが海の家ならず川の家ってことで、川の中にテント(52)が建ったり、別の写真(53)には岸にもテントが写っています。矢作川が夏は海水浴、ああ海水浴というより川水浴と言うのですか？プール替りでした。

名鉄電車のパノラマカーもなくなっちゃいましたが、こういうところにパノラマカーが写っている写真(54)なんかを写しておかないといけない。多分プロの方が撮っておられると思いますので、またアーカイブできれば良いかなと思っています。

橋のもとには蜂須賀小六と幼少時代の豊臣秀吉との出会いの像もありましたが、橋の改修工事でどこかに保管されていると聞いています。また同じようなこの辺に立つんでしょうね。ここが砂の造型(55)場所ということで、現在さらに整備されています。矢作橋の前後の国道1号でも大規模整備改良工事が盛んにおこなわれていて、どんな道路になるか楽しみですけれども、まだかなり長期間の工事になると思います。

## おわりに

次ページの図面は昭和2年の岡崎の康生付近の今で言う住宅地図みたいな図で、屋号も記されています。これを見ると昭和の初めの岡崎中心市街地には一時期県庁があったくらいの場所なので裁判所、刑務所、税務署などの官庁街みたいな街(56)だったので。岡崎市役所(57)は籠田公園の少し南にあると記されています。その他三銘座とか岡崎劇場もここにありますが、岡崎学園女子高校の前身である裁縫女学校も花崗町の三河別院の辺に見えます。それから梅園小学校(58)、師範学校(59)現在の附属小学校、それから商業高校という裁縫女学校ですか、連尺小学校は大林寺曲輪堀の北側で今のり

ぶらの建った場所に記されています。本文書店(60)も電車通りじゃないところにあります。右図のような昔の康生周辺を知っておられる方もそうでない方にも、当時の街並みの映像を観ながら歩いてみたようにできないかを思いました。昭和の初め頃の岡崎市街を当時の映像や地図を見ながら散策した気持ちになれるようなプロットタイプの作品をパワーポイントで作りました。しかしこれは私が考えた固定ルートです。子どもも大人も地図と写真を組み合わせて自由に観て回れるような、そんなソフトの開発も夢見ています。地図を見ると写真がある位置がマーキングで判り、写真の多くあるところや、実家があったからとか人により違った方向に、写真を順次見ていけるというような、仮想市街地を散策するような作品になれば素晴らしいと思います。



いずれにしても岡崎の街は江戸時代に大規模に整備されました。明治・大正時代を経て岡崎空襲前の宿場町の様子が残っていた時代、その後の空襲を経験して復興した街、それと現在ですね、この4つの大きな時代の節目によって変わったと感じています。

岡崎二十七曲りのルートですが、人が住んで経済活動も活発だった市街地で400年もの年月を経てもそのルートが奇跡的に残っている。岡崎のように経済活動が活発な町で、ほとんどのルートが残ったというのは、奇跡に近いんだなと思っています。今からでも遅くはありませんので、板屋町辺りは景観条例などで古い町並みを残せないか？建て直すに際は、道路に面したと部分は往時の面影を出来るだけ残すという方法などで、行政が経費面を担当して頂くのですが、保存していくのも一手段ではないでしょうか。

これと同じようなことを名古屋の歴史街道っていうんですか、名古屋城から徳川美術館の間に大きな予算を付けて実施されています。やはり江戸時代という奇跡的に平和が続いた国家を築いた徳川家康公の生誕された地、岡崎の市民は、この街を誇りの思い、故郷を愛して、今は日本中いや世界中に行けちゃう時代なので、外国の人にもでも岡崎が誇る歴史などを説明できたら、岡崎は素晴らしい町だと心底から思います。

実はアーカイブセンターを個人で運営していますが、それは少数の者が楽しむ個人の花火遊びのような考え方を、アポロ計画のようなビッグプロジェクトに認定されれば、様々な業種の方たちが色々な形態の叡智を集めて、宇宙に飛び出して月を回って帰って来ちゃうような、色々なことをシステム化しすることができれば最高です。

また、個人の力というのは非常に小さいし、資金なども限りがあります。行政は勿論、市内の知識人、退職して自由になった人々などが協働して、目的を明確に共有したプログラムに沿って進める、市民からの応援とかね、そんな個人や組織の力が結集できれば、岡崎の町も捨てたもんじゃないし、活用できる歴史遺跡はもっと多くあると思います。

残念なのは、行政と市民と我々との間には相互が協働する道も門戸もがないということです。例えば、大樹寺と岡崎城の間にはピスタラインという暗黙の了解事項があり、

天守から大樹寺小学校の総門、山門を通して本堂までが一直線で結ばれています。そこで山門という漢字についてですが、私の覚えでは山の門と習いました。ところが教育委員会や観光パンフレットは全て、三つの門すなわち三門と記されています。大樹寺の境内に行きますと、駐車場の案内板(61)とか大樹寺がお建てになった看板やパンフレット(62)など全てが山の門になっています。ところが市役所が建てた札では三つの門になっているのです。山門という漢字ですが、日本語は表意文字ですからその漢字の書き方までが統一されるべきでしょう。漢字の書き方なんてことは小さな問題なのでしょうが、私の教わった山の門から、誰が変えちゃったのでしょうか？三つの門と…。大樹寺境内で遊んでいた小学生に質問したら、「おじさん、それ三つの門に決まってるよ」の返事。『いや駐車場には山の門と書いてあるよ』と再度質問した。そうしたら「おかしい？」と言って「母ちゃんに聞いてくる」と走って行きました。そして、お母ちゃんは「山の門のはずだけどね～だって、何で？」と逆質問されちゃうんですよ。そんな気づかないおかしなことっていっぱいありそうです。些細なことでも後世に伝える歴史資産っていうものを扱うときは考えなければ…が、私の希望でありお願いです。

以上、江戸時代 東海道53カ所の宿場町で一番長かったといわれる岡崎宿の歴史遺産「岡崎二十七曲り」についてOAC(岡崎アーカイブスセンター)で収集した江戸時代の絵図や明治23年の近代測量地図・岡崎空襲の後に撮影された航空写真やその被災地復興計画図などを参考にして、全ルートを見直しまとめたものです。

市民や観光客も意識しないうちにこれらが認知され愛されるように、岡崎二十七曲りの起終点を明示したり、曲り角の全てに番号を付けることなどで、歴史遺産の宝庫であるふるさと岡崎を、今までよりもっと誇りに思って、岡崎に暮らす者としての郷土愛なども芽生えることを期待してお話しさせていただきました。

最後に、OACへ各種資料を提供して頂きました方々に感謝いたします。なお著作権のある絵図・写真・地図を使用するには関係機関の承諾を必要としますが、現在はOACプロジェクトでの開発・研究・試行のみの利用ですので、電話での打診程度はしてきましたが、正式な使用許可申請はしていないことを申し添えさせていただきます。

以上で今回の私の講演を終わります。どうもありがとうございました。